

## 武術空手とは

### 武術から武道への昇華

武道と言えば、空手道、剣道、柔道、弓道、合気道……などのことを言います。

そもそも武道とは、武術から「道」になること、つまり稽古を通しての人間形成に重きを置いてきた言葉であり、空手術から空手道、剣術から剣道、柔術から柔道という具合に、時代とともに変遷してきました。ところが近年武道は、競技試合の傾向が強くなり、ルール上の制約から、本来の武術の技は制限され、それに代わって競技試合に有利な単純な技だけが残りました。それは、技とは言えない内容になっていると言っても過言ではありません。

またその稽古のあり方も、勝敗に重きを置いた相対性の強いものになっており、今や武道はスポーツと言ったほうが誰の目にも適正に写ると思います。

武術の歴史をひもといた時、武術とは本来自分を護ることにあり、また敵を倒すことにありました。しかしそのような生か死かという場に臨み、またそのような場を何度もくぐり抜けることによって、武術の

あるべき姿は必然的に「戦わずして勝つ」という方向へ導かれていったと言えます。そして、そこに「戦わずして勝つ」を裏付ける術技や心のあり方などの極意が生み出されていったと考えます。

術技はあくまでも相手を一撃のもとに倒すことを求めたものでありますが、そのような術技も、「覚悟」という心があつてはじめて自由に使えるものでした。そうした必然から、術技と心のあり方は切っても切り離せぬものとなり、その両者の一致にこそ、真の極意があるという次元に高まっていったと言えます。

「覚悟する心」というのは、絶対的世界へ身を置くことによって得られる悟りであり、それは、もはや自力本願の宗教とも言えるものではなかったかと思えます。拳聖、劍聖と言われた多くの人々は、そのような境地をいろいろな形、言葉で残しています。

それは次のような教えにもよく表われています。

勝ちに三つの勝ちあり

打ち込んで勝つは、下の勝ちなり

勝って打ち込むは、中の勝ちなり

戦わずして勝つは、上の勝ちなり

生と死をかける時代背景のなかでこそ、このような言葉は生まれてくるのだと思います。だからこそ、その言葉は真理であり、時代を越えて生き続けるのだと言えます。

このような教え、言葉の意味は、頭でも充分理解することはできません。しかし真の理解とは、その言葉を裏付けるプロセスの実践を経てはじめて可能となります。そして本来武道というのは、このような実践、すなわち武術という実践を根源とするものであり、稽古にあたっては、武術が武道に至る経緯を決して忘れてはならないと思います。

以上から、競技試合の勝敗に重点が置かれ、本来の姿とはかけ離れてしまった近年の武道界にあつて、あえて私は「武術」という言葉を大事にし、かつ武術としての「術技と心」を学び、その「武術と心」の裏付けをもって武術から武道へと昇華したいという考えに至った次第です。

そのような考えに至ったのも、私が武術空手の原点に戻れる環境に恵まれていたからです。それは、師である座波仁吉先生（心道流宗家）の存在と、先生によつて教え導びかれた沖繩古伝空手（琉球手）の型があつたからこそですが、さらに重要なことは、先生から型からの形化を学んだということです。先生は型を非常に大事にされました。しかし先生はそれ以上に、型のなかに隠されている術技を引き出し、それを自分のものにすることを厳しく指導されました。なぜならそこに至つてはじめて、型は術技として使えるものになるからです。そしてまた先生は、使える術技に至るとは、すなわち「人間を創ることにある」ということに気付かせてくださいました。

## 空手のルーツ

沖繩は今から約六〇〇年前、三山（北山、中山、南山）に分かれて対立していた時代に、当時の尚氏王朝、尚真王が国を統一するため、武器撤廃の宣言をし、平和の道を選んで今日に至つたという歴史があります。

この歴史のなかから武器をもたない手（テイ現在の空手）が生まれました。これが空手のルーツです。人を大切にすると、争わないという手（テイの歴史こそが沖繩の心であります。現在、私たちが継承する空手においても、その歴史と沖繩の心をよく知つた上で修業しないと、本来の空手とは違うものになってしまうでしょう。

このように沖繩古伝空手は、武術によく見られる各流派、各流儀というような個としてのものではなく、国としての歴史、文化であります。そのようなルーツがあるからこそ、世界に発信していけるエネルギーが内在するのです。

そうしたエネルギーを得るためにも、現在のスポーツ化した武道が、その原点である「武術」に戻ることは賢明だと思えます。

次にあげる文献は、沖繩空手の拳聖・摩文仁賢和、中宗根源和両先生による『攻防拳法 空手道入門』の復刻版ですが、歴史の重みを感じさせる内容です。

『攻防拳法 空手道入門』 摩文仁賢和 中宗根源和 共著 一九三八年 榕樹社

（以下の引用は、読みやすさを優先し、かな、漢字とも現代に使われているものに改めた。編集部）

### ▼空手は武術の嫡流

無手空手の争闘に於て、それが真に生死の決戦である場合は、あらゆる技法を無制限に自由自在に発動させることは申すまでもありません。私が今日の空手を以て人類の有する武術の嫡流なりと言うのは、次の理由によるのであります。

- 一、無手空手の争闘は武器を持つての争闘よりも古いこと。
- 二、武器を持つての戦いが、気持の上から（戦国武士の一騎打の如き）、或は又場所の制限から（近代塹壕戦の如き）面倒になり邪魔になる際は、人類は本能的に武器を捨てて無手空手の争闘に還元すること。
- 三、武器は結局借り物である。故に何時如何なる場合にても有効なるは、武器無くして行い得る無手空手の武術が攻防の理想にかなひ、自己保存の本能に合致すること。
- 四、空手拳法には禁手なるものは一つもなく、四肢五体の機能を自由無拘束に活動せしむる武術形式であること。
- 五、柔術拳法は本来無手空手の武術としての目的よりも、武器を持つ武術の補助としての目的で研究せられて来たが、空手拳法は無手空手を本体として研究され来たったこと。

以上の理由により、人類の持つ最も古き武術の嫡流は空手である——といつてもよいと考えるのであります。

（第六章より）

### ▼空手、相撲、柔術

- 一、古代に於ては無手空手で決死的争闘が行われた。
- 二、無手空手の決死的争闘の伝統を正しく継承し、禁手の制限規定を設けず、生命の危険を防止するために単独練武の型を設けて、主としてその型を中心にして研究発達したものが、今日の空手である。
- 三、無手空手の決死的争闘の系統を受けながら、生命の危険を防止するため禁手の制限規定を設け、その限られたる範囲の競技として発達したのが今日の相撲である。
- 四、無手空手の決死的争闘の伝統を受け、空手と同じく禁手の制限規定は設けなかったが、しかし武器携帯の武術の補助的立場に置かれて研究されたのが古流柔術である。
- 五、柔術拳法を母体として生れ、禁手の制限規定を設けて、多分に競技化したのが今日の柔道である。

（略）

右に述べた所から考えて見ると、最も多くの制限規定を設けて全く競技化したものが相撲でありますから、今日誰も相撲を以て武術とは称しません。

次に柔道は柔術から生まれながら、禁手を設け競技化した部分が多分にありますから、武術と競技との中間に位するものと言うことが出来ましょう。今日柔道に対する不満の声は、この禁手があるために制限された武術であるから、物足らぬ感じをいだかせるためではなからうかと考えます。一面に於て近來空手拳法や古流柔術の研究が熱意を以て行われつつあることは、無拘束で禁手がなく、四肢五体を自由に活動せしむる武術であるためであります。

故に、空手の型や組手を体育的美辞の下に武術的意義から遠ざかった体操化をはかることを以て時代と共に推移する——と考える人があるならば、それは思わざるの甚だしきもので、型を体操化する事は空手の武術としての価値を解消する深刻な誤謬の第一歩にあることを自覚しない者と言わなければなりません。空手の型や組手は手の高下、足の伸縮の微細な点にまで厳格に武術的批判は正を怠るべきではありません。

しこうして一面に於ては生理学的基礎に立って、合理的な予備運動や補助運動を以て筋骨や内臓諸機関の機能を高度に調整しつつ、型や組手に於ける武術的内容を充実せしむるよう考えて行くべきであつて、型や組手を体操化遊戯化すべきものではありません。(略)

#### ▼空手は武器なくして攻防共に自在

(以下は、仲宗根源和著と思われる。著者注)

空手は読んで字の如く武器を持たないで行う武術でありまして、身体のあらゆる部分を以て攻撃防御に使用するものでありますから、いざという場合何時何処でも間に合うのであります。

空手は自分の身体そのものが攻撃の武器にもなれば、防御の楯にもなるのですから、これほど理想的な護身の武術はありません。単に健康法としてやっているだけでも、いざという場合には自分の身を護るに十分役に立った実例がいくつもあります。いわんや武術として鍛錬しておけば、それに越したことはありません。

喰わずぎらいの先入的偏見を持つ人ならばいざ知らず、真に武術家として謙虚な気持で公平に物を判断することの出来る武術家ならば、空手の武術的価値を高く評価しない人はありません。空手が最

初東京で紹介せられた揺籃時代に、剣道の大家中山博道先生は自己の剣道道場を開放して富名腰義珍先生の空手宣伝に援助を与えられたことがあります。

また、講道館館長嘉納治五郎先生は昭和二年に沖縄県へ旅行して空手を研究せられたことがあります。その時、剛柔流大家宮城長順先生と糸洲派大家摩文仁賢和先生とが二日にわたつて空手の型や組手を実演せられたので、嘉納先生は高弟と共に熱心に見学せられ自ら立つて種々質問するなど真摯な態度を以て研究せられた結果、その術の精妙なるに感嘆おくあたわず「攻防自在、全国に宣伝せらるべし」と激賞せられたことがあります。剣柔道両方の最高権威者の方々が、空手に対して示された態度こそは、真に武士道精神を発揮せられた日本武人としての謙虚な美しい態度と申さなければなりません。と同時に剣柔道両方の最高権威者が如何に高く空手の武道的価値を評価せられたかを知るに十分であります。

(第五章より)

以上から、武術時代の空手には多くのエキスが含まれていることがわかつています。

現在、武道は世界から見た時、もはや武道としてではなく日本発祥のスポーツとして見られる傾向にあります。まずまずそれに拍車がかかり、その上ルールの改正など、その主導権が日本から海外へ移行しつつあります。

しかし一方で、このような日本武道のスポーツ化に対し、本来の武道の価値が損なわれることを危惧し、原点に戻ることを促す傾向も強まっています。

次の文献は、ミヒヤエル・エーレンライヒ氏（ドイツケルン大学卒。筑波大学大学院修士、現在アメリカ在住）によるものですが、「空手がアイデンティティを失いつつある」という鋭い指摘には考えさせられるものがあります。

また氏が日本人以上に、日本文化としての武道を理解してくれていることに頭が下がる思いです。

『武道としての空手の文化的独自性』（身体運動文化研究） ミヒヤエル・エーレンライヒ著

#### ▼スポーツ化への道を歩みつつある空手

今日、柔道は多くの人々から「子供スポーツ Kindersport」と呼ばれている。それは、柔道を行うのが主に子供と青少年であることによる。オリンピック種目である柔道では、競技年齢を過ぎた後も継続して実践していけるような何らかの方策が用意されているわけではない。日本では熱心な柔道家が減少しているというが、これも同じ方向を示していると思われる。大半の人にとって、柔道を一生続けることなど、もはや意味をなさないのである。柔道はほとんど達成スポーツだけに準拠しているので、もはや大部分の人々の要望や欲求を満たすことができないのである。

すでに柔道が歩み終えてしまったのと同じ過程を、現在の空手は経過しつつある。とうの昔から、スポーツ的成果が多くの中空手家の活動の中心になっていく。換言するならば、試合での勝利という結果を目指し、稽古がスポーツ・トレーニングに移行し、科学的に合理化されていくことを意味している。空手をオリンピック種目として受け入れるならば、そこに商業的な刺激が加味されて、この過程が完

結することになるだろう。

しかし、その後には、独自の価値システムや稽古システム、つまり独自のアイデンティティを持つ日本武道は、西洋的価値に支配された格闘技型スポーツに移行してしまうことになるだろう。大切な何かが失われる一方、それとは異なる既存の西洋的形式がそこに組み込まれてくるのである。

西洋型モデルに基づくスポーツ化が進行すれば、空手に特徴的なメルクマール、空手が保持してきたアイデンティティを放棄することにならざるを得ない。空手本来のアイデンティティの喪失は、余暇活動市場で空手が占めていた居場所の喪失に必ずや繋がってくる。日本武道というアイデンティティを有する空手がスポーツに移行すれば、空手が獲得できたはずの顧客さえ失うことになるだろう。空手には、本来、年齢的に特化された集団など存在しなかった。反対に、あらゆる年齢の人々のもとで生涯にわたって行われうるのを、空手自らのためにも要求できたのである。

スポーツ的達成によらず、学び手の年齢に臨機応変に合わせることで空手の稽古法には含まれていくことができるのである。達成スポーツ化された条件下では、空手実践者のほとんどが達成指向的な子供や青少年だけで構成されるようになるだろう。つまり、空手を生涯的に行うことなど、もはやなくなってしまうざるを得ないのである。

## 武術空手の稽古のあり方

### 武術における型の重要性

本来の武術としての稽古のあり方は、現在の武道やスポーツとは、その理念および目標とするところが異なり、当然その稽古方法も異なります。

武術稽古の特徴は術技の追究と同時にそれを使う人の心のあり方の追究にあり、その究極は「事理一致」にあります。それは、武術が生か死かという場をバックグラウンドにしたところから発生しているからであり、その術技はもちろん、心のあり方は術技以上に重要だったと言えます。

「事」とは技であり、手、足、身体の動きのことです。「理」とは理合いであり心のことです。その「事」と「理」の一致があつてはじめて武術としての術技の妙味を得ることができます。

その「事理一致」を目指すための稽古は、敵対としての相手を意識するところからの脱却にあり、それには型稽古を本質とした絶対的世界に身を置いた稽古が望ましいと考えます。

組手は相対的世界になりやすく、組手を主体にした稽古では、事理一致に至るにはなかなかむずかしい

ものがあります。しかし、型を本質とした稽古は、事理一致の実践には非常に効果的です。

歴史的産物である古伝の型は、極意とも言えるべき術技の集積です。その型の意味と意義を型稽古を通して理解し、さらに型のなかの技を二人の攻防分解組手によって検証しながら「型から自分の形」にしていきます。

このようなプロセスを踏んではじめて組手に使える術技が創出されます。このプロセスの実践が武術稽古ということになります。型は技の宝庫ではありますが、型から形にしなければ宝の持ち腐れとなつてしまいます。

次の文献は、江戸時代における剣術や柔術の稽古の変遷においても、いかに型が重要かを説いたものです。時代は異なっても考えさせられるものがあります。（文献中の「形」は本文の「型」の意味に該当します。編集注）

『宮本武蔵事典』 加来耕三著

### ▼稽古法の本末顛倒

（江戸時代の）剣術や柔術の稽古は、すべて「形」稽古によっておこなわれた。

心・気・力を合一させ、臍下丹田に一切を鎮めて気の充実をはかり、流派によって定められた「形」（型）を反復習練する。

この稽古を倦むことなく、幾百幾千回とつづけ、応用動作を養い、反射行動がとれるようになる——この方法が、各流儀の手段として定着した。

ところが、江戸中期以降、これでは実際の役には立たないのではないか、との疑問の声が一部の流派、剣士たちの間から生じた。

「形」によって技法の手順を体得しても、現実には真剣で斬り合い、組み合った場合には、稽古した「形」とおりにはいかないのではないか、というのである。

——一利はあった。

結果、ここに剣術における防具——籠手・面・胴——の開発や竹刀の登場、柔術における量の定着化、畳上での「乱取り」がおこなわれるようになる。つまり、試合形式の誕生であった。

この延長線上にあるのが、今日の剣道であり、柔道であるといつてよい。

防具、竹刀を使用する新興の流派が、古流名門を圧して流行した。が、己れの技量を客観的にみるべく試みられたはずの試合形式は、やがて、本末顛倒ともいえる、試合に勝利するためのルールを生み出すことにつながってしまう。

日本武道の、悲劇のはじまりであった。

たとえば、剣術は面・籠手・胴・突き以外は試合では認められなくなり、それゆえに、こうした箇所を打ち、突く、競技用の技法だけが発達した。首筋や脇、足を払うなどという実戦に有効な技法は衰えていった。

谷や川べりでの戦法、山道での刀法なども、板の間道場の普及で消滅していく。

構えもいつしか、中段（正眼）と上段のみが残った。

柔術としてしかり、である。

もともと、立・坐・前後・左右と、いずれにも偏しない対処法を無数に有していた技法の体系は、いつのまにか、己れの体格や好みにも偏った技のみを練磨する方向へと転じ、力を抜いて施す護身の技法は影をひそめ、腕力・体力にのみものいわず、力技が横行するようになってしまった。

#### ▼「形」稽古の名人

この方向は大勢であったとはいえ、正しかったのであろうか。

言い換えれば、武蔵の時代の技法Ⅱ「形」稽古だけでは、真に武術を体得し、強くはなれないのであろうか。

防具の着用による、竹刀の試合形式が隆盛を極めた江戸末期、一刀流の中西忠兵衛子正の門下に、寺田五右衛門という剣士がいた。

寺田は構えた木刀の先から、火花が吹き出すといわれたほど、厳しく激しい太刀筋の遣い手であったが、生涯、竹刀での稽古をおこなわず、ひたすら「形」稽古に終始した。

この寺田にある一日、数人の高弟が試合を所望したことがある。

寺田は応じた。

「拙者は試合そのものを好まない。しかし、強<sup>た</sup>つてというのであれば、是非には及ばぬ。拙者は馴れた素面・素籠手で、木刀をもってお相手するから、お手前たちは面・籠手の防具に身をかため、当方に隙あらば少しの遠慮もいらぬ。顔なり、腹なり、勝手次第に存分に打ちすえ給え」

高弟たちはその広言に憤り、試合形式がいかに優れているか、寺田に目にもものを見せてやろうと防

具をつけ、竹刀を手にして立ち向かった。

かたや寺田は、二尺三寸五分の木刀を携えるのみである。

防具に身を固めた高弟の一番手は、足捌きも軽やかに、いまにも寺田の頭上に、一本を決めてやろうと打ち込む刹那、

「面に打ってくれば、摺り上げて胴を打つ」

と寺田の声。相手はハツとして、打ち込む気力を喪失してしまう。次の高弟が、寺田の籠手を狙うと、「籠手にくれば、斬り落として突く——」  
と言う。

かわるがわる寺田に立ち向かったものの、高弟たちは誰一人として、寺田に一本も打ち込むことができなかった。

これは『撃劍叢談』<sup>げきけんそうだん</sup>が記すところだが、似かよった挿話は枚挙に遑がない。<sup>いとま</sup>

「形」稽古のみでも、名人・達人は生まれた。

なぜか、答えのすべては「形」の中にあつたのである。

### 型によって導かれる内面の気付き

型稽古の重要性は、まず型としての外面であり、次に内面の気付きによる身体の統一であり、さらに内

外面の一致ということにあります。そのなかでも目に見えない内面の気付きは重要で、型の稽古を続けていると、ある時点から意識が外面から身体の内面へ移行し始めます。それは型をすることによって自然に気付くというものです。

その気付きの特徴は、身体を常に統一体としてとらえ部分と全体が連鎖しているということです。つまり部分的な動作であっても、その動作が全体に連鎖しており、最大効率の身体動作を生み出すことにつながるということです。たとえ指の先であっても、それは統一体としての指先であるという感覚です。このような内面の意識は型という外面があるから可能となるもので、もし外面の型がなく内面の意識だけだとすると、部分的なものとなってしまいます。

その統一体としての最大の役割をしているのが、身体の呼吸です。さらに身体の呼吸は統一体としての集中心を創り出し、それが「氣」になります。ここに型の最大の特徴があります。

ところが組手稽古を主体にすると、相対の意識が強くなり、外面が主となり、内面の気付き、また内面の気付きによってできる身体の呼吸にはほど遠くなってしまう。

サンチンの型における突きについて言えば、「呼吸に合わせて突きをする」「突きに合わせて呼吸をする」、このどちらでもなく、内面の気付きによる身体の統一によって「呼吸と突きが一致する」ことが必要です。このことによって突きの威力は生まれます。しかし初心のうちは往々にして意識が先行し、意識に支配された外面の動きが主体となり、それで満足してしまいます。

外面を主体にしている時は部分的なパワーとなり、突きにしてもその突きは軽く、威力はありません。それは内面のエネルギーを伴っていないからです。しかし身体の内面の気付きと言えども、それが我流と

なつては意味がありません。

ここに、型稽古の重要な意義があります。

そのような内面への気付き、気付かせる方法として「一触」があります。言葉という手段もありますが、見えないものを言葉で表現するにあたっては、どの程度それが可能かという問題があります。それは、統一体としての複雑なつながりは言葉で説明できるようなものではないからです。

たとえば全体のつながりとして「連動」という言葉を使えば非常にシンプルでわかりやすく理解はできますが、言葉としてわかったということ、連動という内面の働きのわかるということとは意味が違います。真の連動は、身体を通しての実践を伴わない限りわかるものではありません。言葉による伝達のむずかしさ、さらには危険性もここにあります。

しかし、「一触」があつてはじめて言葉も補助手段として生かされます。

「型」は鑄型であり不変であるからこそ、自分をその型にはめようとした時、自分の身体が自由にならないことに気付きます。そこからその要因を求めて内面への気付きが始まります。内面の気付きは部分から全体への拡がりになり、かつその本質が呼吸にあるという認識へ導いてくれるのです。

### 座波先生の当破<sup>当</sup>

これまで多くの人の突きを見てきましたが、いまだにそのすごさを感じるのが、現在八十九歳の座波先

生の突きです。これほどの突きはほかに見たことはありません。稽古のたびに先生の突きが目には焼き付き、どうしたらあのような突きができるのか、自分でもいつかは、いつかは……と思いつながらやってきたのですが、近づけば近づくほどその深さを感じます。

学生の頃、最年少で出場した第二回全日本空手道選手権大会（一九七一年十月、日本武道館）当時は、先生の突きのすごさはまったくわかりませんでした。社会人になって直々に教えていただく機会を得た頃から、次第に先生の突きは何かが違うことに気付き始めました。それからはその意識をもって、従来の突きのレベルアップを求めて稽古していました。

そうしているうちに、その違いが少しずつ見えるようになり、自分の突きの延長線上に先生の突きがあると思っていたのですが、スタート時点からまったく別の線であるということに気付いたので。すなわち先生の突きは沖縄古伝空手の突き、「当破」だということの気付きです。

そこに気付いてからやつと第一歩を踏み出したわけですが、それ以来、俄然稽古に希望が出てきました。不思議に思いました。古伝空手の突き「当破」は高い山ではあるけれど、それを身に付けられるのであれば、という思いが強くなり、古伝空手への魅力にますます惹きつけられていきました。

先生の突きを見るたびにいつそう差が開くように感じることもありましたが、脱線することなく今日までこられたのも、先生との稽古を通して自分の目に焼き付いた先生の突きの威力、瞬発力の魅力を言葉でなく、身体で感じることができたからだと思えます。

## 突きのレベルがそのまま防御技に

武術空手では突きのレベルがそのまま防御技のレベルになります。その時点での突きの瞬発力、威力の度合いが、そのまま防御技の身体動作となるからです。したがってスポーツ的な空手の突きに対する防御と、武術空手の突き「当破」に対しての防御では、その防御の内容が異なります。

現代空手の突きは直線的でスピードの速い遅いはあるものの、目で追うことができます。しかし当破の突きは目で追うことはできません。それだけ内容に本質的な違いがあります。このような差が、そのまま防御技の差にもなるということです。

いくら相手の突きや蹴りに対して防御の稽古を積んでも、基本的には身体は自分の突きのレベルに合った攻防しかできません。自分の突きが現代空手の線上にあるとすれば、いくら稽古してスピードをつけたとしても、その線上にない瞬発力の当破に対しての防御は不可能です。

当破は全体的なものです。当破を身に付けようとするなら、当破と呼ばれるだけの突きを実践している人の術理を見て自分のなかに焼き付け、身体でそれを感じ、実践していくほかありません。

このような当破ができる身体があつてこそ、一方で当破の防御ができるということです。それが自分の防御のレベルにもつながるのです。

相手にダメージを与えるのが突きであり、相手を観念させるのが当破であります。武術の稽古は当破を基本にした攻防であることが必要です。

## 武術としての稽古——木刀に匹敵する当破

空手の最大の特徴であり象徴である突き、当破は、柔から出る剛であり、かつ瞬発力を伴うものです。

空手の当破は木刀の打ち込みおよびその返しに匹敵します。それは当破が木刀の稽古と同じくらいの危険を伴うからです。ふつうの突きでも当てればそれなりの危険はありますが、当破の字のごとく「急所に当てて打ち破る」という状況とは異なります。このような当破による攻防の稽古は、「止める」ということが絶対条件になります。

木刀の場合も、たとえ相手が初心者でも、打ち込まれば相当な危険を伴います。とくに頭部においては生命にかかわる危険を伴います。したがって当破同様、攻撃に対する防御の返しは、確実に「止める」ことができれば相手に怪我をさせてしまいます。

木刀で打ち込んでくる相手を、木刀で打ち返し、相手の頭部スレスレで止めるのは、身体の柔の剛ができていないとかなりむずかしいものがあります。一般的な打ち返しは自分の意識で止めている場合が多く、これでは真の打ち込みにならず、かつ止めた時点で居付いてしまい、その後の動作ができません。できたとしても二挙動となり、武術的動きではありません。

木刀による打ち返しは、意識ではなく術技としてできなければなりません。打ち込んだあとにも相手を制し、相手の身体の呼吸を止めることが必要です。

このように稽古というのは厳しい状況下で行なう心構えが必要だと言えます。そういう意味合いもあつて私は稽古の時はまず木刀での打ち込みと相手の打ち込みによる打ち返しを行なうようにしています。ま

たそれが、空手の当破のレベルに匹敵するからでもあります。

木刀稽古の延長線上には真剣による稽古も考えられますが、現代竹刀剣道の延長線上には真剣はもちろん木刀稽古さえも見ることはできません。それは姿勢に問題があり、相手に当ててポイントをとるという姿勢は、木刀による打ち込みの姿勢や真剣による斬るという姿勢とは、その本質が異なるからです。本来は、竹刀と言えども、その姿勢の延長線上には、木刀、真剣が「使える」というレベルがなければならないはずですが、残念ながら、そのようなレベルにはなっておりません。

空手にあっても同様です。その突きは、素面に木刀を打ち込むのと同じくらい危険な、威力のある突き、すなわち「当破」「入り込み」でなければなりません。このような真剣な気持による稽古によってこそ「事理一致」の境地に達することができ、武術としての術技が使えるようになると言えます。

また、このような稽古では、「できるかできないか」が明確になります。「少しだけできる」ということはありません。できるかできないかの世界です。それだけに目標もはっきりするので、稽古にやりがいが出てきます。

次の文献は、幕末の剣聖山岡鉄舟が素面木刀の稽古についてその心得を語ったものです。

『山岡鉄舟・劍禪話』 一九七一年

#### ▼剣法を修業する者の条件

中古には、剣術修業といえ、どの流派でもみな素面で木刀によって行なっていたのである。しかし、いまから百年ほど前になって、諸流派ははじめて面具や半首、小手、胴を使うようになった。

そのようになった理由は、防具を使えば体を練り、業を励むことができ、相手を十分に打ちこめる利点があるということにほかならない。

素面で木刀による試合では事情が異なっており、でたらめに進んでゆけば自分の身体が傷つく恐れがあるばかりか、敵の刀勢や身体に触れようとすれば、どんな者にも届いてしまうのである。進退の動作を鋭くし、弱い調子のなかにも強く打つところ、強いなかにも弱く出るということをよく理解しなければ、素面木刀の試合をおこなうことはむずかしいものになってくる。

中古、諸流の剣士のなかには、他流試合の場合に刃引の真剣あるいは木刀を使う者が多く、たちどころに相手を打ち倒し、切り殺した例が数え切れないほどである。それは、自分を師として剣を学ぶ者を傷つけることは、師である者のこのうえない恥であり、(ふだんの稽古では)そのような教え方をしなかったからである。

しかし、剣道においては、形にはまらないことを必要とし、自在の変化ということを学ぶのであるから、変化の次第によっては、絶対に太刀が当たらないといえるものではない。

だが、優者が劣者を助けるのは天の道というべきであり、そこにはまったく疑問の余地がないではないか。それなのはどうして、あのいま流行の面小手試合は、ただ勝負だけを争うのだ。優勝劣敗は